



Yuni Hong Charpe

Sweeper, パフォーマンス, Festival 100%, Grande Halle de la Villette, Paris, 2019



« *Je crée une œuvre* ».



だからぼくも叩いた

一人の子供が、ある争いについて、語るのと同時にそれを聴いている。

攻撃された、と思うとき、その真偽は別として、ぼくたちは「被害者」となりえる。こうして生まれた淡い被害者意識は、時間が経つうちにぐんぐんと大きくなり、憎しみへと育つことがある。ここ数年で拡大する、ヘイトスピーチが一つの例かもしれない。このような、被害者意識をまとった憎しみへの違和感が、この作品の出発点だ。

やられたからやり返す、というサイクルに乗ってしまえば、ぼくたちは被害者であると同時に加害者でもあるのだろう。繰り返される被害と加害の関係を前に、ぼくたちはどうするか？

Hate
video, 5'44, The 9th Maebashi Media Festival, 2018

ビデオリンク: <https://vimeo.com/297939142/403a113ec9>



僕の痛みが分かるように



ぼくは言う

Hate
video, 5'44, The 9th Maebashi Media Festival, 2018

ビデオリンク: <https://vimeo.com/297939142/403a113ec9>



Discours du rêve(夢のスピーチ)
パフォーマンス, 15分, YGREC, Paris, 2017

コンセプト Yuni Hong & Ayuko Nishida, 演出 / 振付 Yuni Hong
ダンス Jeanne Bathilde, Yuni Hong, Mélaïne Loison, Zoé Philibert, Antoine Vallé
朗読 Ayuko Nishida, 写真 Woosung Sohn



朗読をする写真家、五人のダンサー、夢に関するスピーチの断片をプリントしたものが、ギャラリー内の異なった場所に現れる。ジェスチャーと言葉は、時にユニークで特別な関係をつ結びながら共存している。



Discours du rêve
Photo : Woosung Sohn



un match (対決)
パフォーマンス, 約12分をループ, 広島現代美術館, 2017
写真: Kitae Kenji (Hanada Photograph Studio)
映像: Soni Hong

透明なラケットを手に、見えない相手と「対決」するパフォーマンス。ラケットは、戦後広島で平和への願いを込めて考案されたエスキーテニスから着想を得た。一見すると滑稽なその対戦姿は、現在の私たちが手にする平和の不確かさ、危うさを意識させる。



Je m'appelle junky / tout va bien(すべてはうまくいっている)
パフォーマンス, 約15分, Pierre et Marie Curie市民プール, Mulhouse, 2017
写真: Sébastien Bozon



Je m'appelle junky / tout va bien
(すべてはうまくいっている)
パフォーマンス, 約15分,
Pierre et Marie Curie市民プール, Mulhouse, 2017
写真: Sébastien Bozon

ミュールーズ市にあるフランス歴史的建築物に指定されている市民プールにて、一般のプール利用客とともに行われたパフォーマンス。
作品はいくつかのシーンから成り立ち、シーンごとに異なった青いオブジェクトが使用される。プロテーズのように水着の内外に装着されるオブジェクトは、ビート板の素材を使用し制作された。



Je m'appelle junky / tout va bien
(すべてはうまくいっている)
パフォーマンス, 約15分, Pierre et Marie Curie市民プール, Mulhouse, 2017
写真: Sébastien Bozon



kitchen (キッチン)
パフォーマンス, Archives nationales Pierrefitte-sur-Seine / Quartier Général
2015

写真 : Chiahibou
協力 : アソシエーション Dans la Norme



椅子に座った観客と、食事についての記憶を交換する。パフォーマーが話す記憶の元の持ち主は、その観客のすぐ前にその椅子に座っていた観客である。記憶の交換後、今や自分のものとなった記憶をパフォーマーは次の観客へ話す。

Paris Match(パリ・マッチ)
パフォーマンス, 20分, Villette Markerz(Festival Escapes Liées), 2018
ダンス: Yuni Hong
レクチャー: Ayuko Nishida

協力: IGLOU Paris, Onirisme Collectif

60年代から70年代発行の雑誌・Paris Matchに着想を得た。パフォーマンスは、雑誌から引用された文章の朗読と、掲載された写真から生まれた動作より構成される。





Camara (カマラ)

レクチャーパフォーマンス, 15分

Archives nationales, Pierrefitte-sur-Seine / La Dynamo de Banlieues Bleues, 2015

協力 : Wagul Camara, Makiko Andro-Ueda

写真 : Hubert Crabières.

60年代にモーリタニアからフランスへ移住したワグル・カマラさんと、日本からフランスへの移民である上田マキコさんの出会いから現在までの話に触発され制作された。朗読中、語り手が変化するに従って、使用される言語がフランス語から日本語へと徐々に交差するレクチャーパフォーマンス。



à vendre (売ります)

アクション, 二日間, Maisons Daura (Saint-Cirq-Lapopie), 2016

写真: Julia Mensch

協力: MAISON DES ARTS GEORGES ET CLAUDE POMPIDOU

観光客の増加によるミュージアム都市化が進むサン・シル・ラポピの道端で、観光客の一員として、日本製の炊飯器を二日間(1日2時間)売った。



master of none

パフォーマンス, ARTCLUB, France, 2015
協力: OPJ Cyganek, Orion Giret, Julie Poulain, Anna Principaud

ノート:

アートスクールから出ですぐに、私は名刺を作った。その47枚の名刺には、私がアーティストでなければやりたかった全ての職業が一つ一つ記されていて、受け取った人は私に連絡できる。写真のパフォーマンスは、カードに記された職業「バックダンサー」に従って行われた。



uhulu !
ワークショップ, 映像, カード, 2016
協力 : Tour-de-Faure学校の子供達, Maison des Arts Georges et Claude Pompidou

MAGCP国際アーティストレジデンス中に実施した子供達とのワークショップ。ロット川の水辺で音を収集し、子供達自身の声で再現した。その音の記録と場所の記憶を元に、子供たちと新しい言語を発明し、カードゲームを制作した。



Comment je suis devenue une française (フランス人になる方法)
performance, 10', 2014
ミュルーズ国際ビエンナーレグランプリ受賞

私がどのようにしてフランス人になったかを、日本語で日本語が通じない観客に説明するパフォーマンス。同じ言語、つまり同じコミュニケーションのルールを持っていない人同士の間には、パフォーマンスを通して、一時的なマイクロコミュニティを作り出す可能性を探った。